
今日の藍堂さん家！

友加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の藍堂さん家！

【Nコード】

N1498J

【作者名】

友加

【あらすじ】

藍堂家三原則“近づくな・絡むな逆らうな”！
めっちゃ怖い不良たち？ いえいえそんなことはありません。めっちゃお馬鹿でめっちゃ愉快！ 今日も藍堂家はお祭り騒ぎ。

静か？なにそれ、おいしいんですか？

1 朝ぐらいお静かにっ！（前書き）

始めちゃいました、新連載！

「今日の藍堂さん家！」は、「あいどろさんち！」って読めます。

1 朝ぐらいお静かにっ！

ピピピ ピピピ・・・

四月二十日の朝。

五時四十分に、ケータイのアラーム音が鳴り響く。

「くあっ……もう朝か」

小さな欠伸をして、アラーム音を止める。少女
名残惜しそうにベッドからのそのそ出る。

あいどうみかけ
藍堂実景

は、

「ハア、料理当番まわってくるの早いっつの」

ぼそぼそ言いながら、着慣れた制服に腕を通す。

「本当に眠い……」

そんなけとをぼやきつつ、革のスクールバッグを掴んで階段を降り、
キッチンへ向かう。

「さて、何作ろう……」

冷蔵庫の中を確認する。

「……何もねえじゃんか！！！！」

入っていたのは牛乳と、昨日の夕飯の残りの肉。

それから、4つの卵。

「4つ…後2つたりない」

仕方がないので、男は米と肉。女はパンとスクランブルエッグにすることにした。

「俺の飯どれ？」

制服を着た、実景の1つ下の弟 醍哉たいやがリビングに入ってきた。

醍哉は、髪を銀に染め、左耳にピアスを付けている、れっきとした不良だ。

実景も髪を赤茶に染めているが、醍哉ほどではない。

時刻は6時35分。

「男組は米。起きるの早いね」

「今日の洗濯当番、俺なの」

醍哉は椅子をひき、ゆっくりと腰を下ろす。

「あ？そうだったけ…あず姉だと思ってた」

実景も椅子に座り、手を合わせていただきます、と言う。
それに合わせ、醍哉も言い、味噌汁をすすす。

「あず姉は明日だ。みいは今日も朝練？」

「今日は何曜日？」

質問に質問で返され、少したじろつ。が、すぐに

「水曜日」

と応える。

「そ。だから朝練なし」

「ああ、朝会か」

「あのジジイの長いお話しの間だよ」

「遅刻すつか」

「殺すよ、醜哉」

嘘だつて、と言いながら牛乳を飲む。

ちなみに、実景は吹奏楽部でパートはフルート。八歳のころから習い始め、今までにいくつもの賞を取っている。

「にしても、みいがフルートって合わないな」

「言うな…あたしもそう思ってるから」

「俺はそんなことないと思う!」

「そうね、実景はティンパニーを叩いてそう」

新たにリビングに入ってきたのは、高校2年の双子。兄の棗吾そうじと妹の梓あすひ。

棗吾は黒髪で縁のあるメガネをかけている、シスコンである。

梓も黒髪で、長い髪を巻いている見た目は可愛い系。人をからかうのが好きなら。

「そう兄、あんま嬉しくない。あず姉は和太鼓でも叩いてれば?」

「お兄ちゃん悲しいぞっ」

「悲しんでろよキシヨい」

と醒哉が言う。

「私は可愛らしくトライアングルでも叩いてるわ」

「あそ」

「もう冷たいわねえ」

とプリプリ怒りながら、2人は椅子に座り、朝食を摂る。

「翔太は相変わらず起きるの遅いな」

翔太、とは高校1年の藍堂家の次男にあたる。

「そう兄がお越しに行けばいいじゃねえか」

「醍哉の言う通り。はい、行ってらっしゃい」

実景と醍哉は、棗吾に容赦ない。

「マジックハンド使う？これないと、噛まれて指持って行かれるわよ」

どこから取り出したのか、梓が棗吾に渡す。

「じゃあ梓が行けっ」

「棗吾が行きなさいよ！」

梓の言葉に実景と醍哉が、そうだそうだと言う。

抵抗していた棗吾だが、ついに折れ、渋々マジックハンドを受け取り翔太の部屋へ向かう。

しばらくすると、2階の翔太の部屋から棗吾の絶叫が響く。

「「そう兄…南無っ！」」

「マジックハンドでも駄目みたいね…さすが翔太……」

実景と醒哉は手を合わせ、梓は翔太の寝起きの悪さに感心する。

「」馳走様」

「うえっ！醒哉早い」

「男は早いもんなんだよ。みいはゆっくり食べてれば？」

「凜を起こしに行かなきゃ」

「ああ、凜ね……」

醒哉は遠い目をする。

凜は小学4年の藍堂家の三女、末っ子。とにかく幼い。

「凜は…ゆすつても起きてくれないんだよな」

「凜は藍堂家の眠り姫ね！」

「悪くないネーミングセンス」

「実景ちゃん？ちょっとお外に行こうか」

真っ黒ねオーラを放ちながら、素敵な笑顔で手招きする。

「うん。遠慮しとこうかな」

「なんか今日、みんなうるさいよあ…?」

リビングには凧が眠い目をこすりながら立っていた。
ピンクのパジャマのまま、左手にはうさぎの人形を持っている。
名前はカトリーヌ。

「起こしちゃったね？」

と梓は凧に近寄り、頭を撫でる。

(っしゃー！今日ツイてる)

実景はひそかにガッツポーズを取る。

「うおおおおっ！！！！りいん！愛してるぞあ！！」

凧の声を聞いて、棗吾が抱きつく。

「そーご兄ちゃ、おはよ」

凧のエンジェルスマイルに棗吾のロリコンメーターがMAXに到達する。

「テメっ、そう兄！凧から離れろっ！触れたところから腐るから！

！」

実景は棗吾をバリッと剥がし、凜の体をはたく。

「俺もやる！！！」

「馬鹿だろ、兄貴」

エナメルで棗吾の頭を叩くのは、不機嫌そうな翔太。

「しょう兄、低血圧すぎだろ。朝いつもキレ気味じゃねえか」

「僕の睡眠を邪魔されてるんだ。キレイいでどうするのさ？」

「朝飯でも食ってればいいよ。早く食べてね。あたしが洗うんだから」

実景が翔太に言う。

凜は梓と一緒に顔を洗いに洗面所へ向かった。

「凜！俺が顔を洗ってあげる」

「乙女のテリトリーに踏み込むんじゃないわよ？」

「おかお、あらって」

「棗兄、翔兄と早く朝飯食え！」

「僕は一人で食べる」

「みい！昨日のうちに洗濯モン出せつつたろ！」

今日も藍堂家は、朝から破天荒。

2 藍堂家ノぶろふいーる(前書き)

詳細っつーか、会話で進めていく
キャラ紹介話です。

読んだ方が分かりやすいかと…

2 藍堂家ノぶろふいーる

実「えー、今回はあたしたちキョウダイを詳しく紹介しちゃうぞー」
「ナーっばい」

醒「何だよ、っばいって」

実「…って作者の友加が言えって」

梓「相変わらずムチャクチャね」

凜「くちやー」

棗「りいん！可愛いぞおお！！！！」

翔「うるさい兄貴。ガムテープ貼り付けるよ」

実・醒・梓「是非お願いします」

っつーわけで、次のページから藍堂家紹介スタート！

実「ここはやっぱり長男の棗兄からだね」

藍堂 稔吾あいでいじゆんご

藍堂家の長男。梓とは双子。

梓「まったく、私の人生最大のミスよ」

稔「俺もだよこの野郎」

1992年5月4日生まれの牡牛座。血液型はA B。

醒「A Bって稔兄だけだよな」

翔「そう。一番絡みにくい人間だよ」

稔「待ちたまえ弟たちよ」

梓・実「うざ……」

凜「うざー」

稔「……………」

実「灰になっちゃったよ」

清和高校に通っている高校2年。共学で、レベルはかなり高い。部活は帰宅部で、成績は上の上。

梓「帰宅部なのは凜と一緒にいたいからよ?」

実「信じらんない!このシスコンっ」

翔「僕より頭がいいのは腹が立つね」

醜「……………」

運動は、得意不得意の差が激しい。

醜「水泳は得意だよな。昔スクール通ってたし」

実「不得意は体操だよな。棗兄めっちゃ体硬いし」

梓「だからシスコンなのよ」

翔「姉貴、それは関係ないと思うよ」

凜「よー」

とにかく凜が大好き。実景は凜までではないが大好き。梓は普通。

梓「私は大嫌いだけどね」

実「リバースしていい？…ちよ、翔兄バケツ持って来るとかリアル醜哉、エチケツト袋もいらさないから。お前らの持つてるものリバースしてこい」

凜「凜もそう兄ちゃ、だいすきー！」

棗「2人で愛をはぐくもう！！！！」

梓「灰に戻りなさいよ」

容姿は、少し短めの黒髪で、黒縁のメガネをかけている。
身長は180センチと長身。

翔「学校にいても兄貴の話しは結構聞かれるね。特定の人間には話すけど、それ以外は黙らせてるよ」

梓「翔太と親しくするには相当な努力と時間が必要ね」

藍堂 梓あいら

藍堂家の長女。 棗吾とは双子で妹にあたる。

梓「人生やり直したいわ。 棗吾のいない人生を」

棗「倒置法使って強調させなくていいだろ！」

誕生日は棗吾と同じで、血液型はA。
几帳面で、意外としっかりしている。でもS。

実「この家が綺麗に保ててるのはあず姉のお陰だね」

醒「人の弱みを握るの好きだよな」

翔「僕に弱みなんてないから話しは別だね」

梓「そんな翔太はつい昨日、夜」

翔「姉貴っ!？」

梓「翔太の焦った顔可愛いわ…なんていじりがいのある子なの！」

棗・翔・実・醜「……………」

栄華学園に通っている高校2年。女子高で、レベルはそこそこ高い。部活は華道部。センスは非常に良い。運動は長距離のみ得意。

実「あたしも女子高行ってみたい」

梓「楽しいわよ。何でも遠慮なくできるから」

醜「何すんだよ」

梓「乙女のヒ・ミ・ツ」

凜「ひみちゅー」

棗・翔・醜「……………」

梓の容姿は、ロングとセミロングの間くらいの黒髪を、ゆるく巻いている。

身長は165センチ。スタイル抜群の美人。

梓「美人ですって！」

棗「凜のが美人だ」

梓「死んでくれないかしら」

実「あず姉は普通に可愛いよ」

醒「俺もそう思っぜ。みいには負けると思っけど」

凜「あ！みい姉ちゃ、照れてるー」

翔「明日は槍が降るね」

藍堂 翔太しよつた

藍堂家の次男。

1994年2月18日生まれの水瓶座。血液型はB。

棗「意外とマイペースだよな」

梓「絡みにくそうにみえて、実はフレンドリーなタイプよね」

翔「意外と実は余計だよ」

醒「朝は気分が悪い」

実「夜は比較的テンション高め」

凜「しょう兄ちゃ、てーけつあつー！」

翔「……………」

棗吾と同じ高校に通う、高校1年。

部活は一応陸上部。けど、何故か生徒会会長の立場なため、なかなか部活に顔を出せない。

醍「本当に何で翔太が生徒会長なんだ？」

棗「気が付いたら会長になってたんだよな。俺もさすがに驚いたな……どれくらい驚いたかつつーと目が飛び出るくらい驚いた」

実「普通すぎる表現だね。無駄に長いし」

翔「会長の権限で君たちの成績オール1にしてあげるよ」

梓「私たち関係くない？」

棗「おう、やってみろ馬鹿野郎」

実「馬鹿野郎はアンタだよ！」

醍「棗兄のザマア」

凜「ざまー」

棗「……………」

梓「グッバイ、棗吾」

翔太の容姿は、少し長めの黒髪。微妙にクセつ毛。身長は168センチと、少し小さめ。

醍「たしかに翔兄は小さいな。俺と同じくらいか」

翔「醍哉、あとで表出る。僕が一番気にしていることを軽々と口にするな」

梓「おーおー、怖いわね」

棗「梓も十分怖いときあるよな」

梓「棗吾々？ちよつくらその汚え面寄こしなさい」

凜「あず姉ちゃ、こわい……」

藍堂 実景^{みかげ}

藍堂家の次女。

1996年3月22日生まれの牡羊座。血液型はO。

翔「一つ一つが適当」

棗「一番大雑把だな」

梓「服脱ぐとき、ちゃんとカゴに入れなさいよ」

実「……………」

醒「照れるとこじゃないぜ」

市内の三崎中に通う、中学2年。

部活は吹奏楽部で、パートはフルート。成績は上の中 数学に関しては下の下。

翔「この前全国大会で優勝してたね。あれは流石だ」

梓「あの時はハラハラしたわ」

醒「こっちまで緊張したぜ」

棗「優勝したてきは嬉しかったな…にしても、俺と梓と翔太の3人がかりで数学教えたのに20点しか取れなかったのは……」

実「言うなああああつ！！！！」

運動は大得意。とくに短距離は飛躍的に。

梓「数学と掃除以外はパーフェクトよね」

実「言うなああああ！…やべ、前が霞んで見えない……」

棗「泣いてる実景可愛いぞ！」

実「おぼろろ……」

醒「エチケット袋カムバック！」

基本、男勝り。男女ともに人気がある。

凜「みかげ姉ちゃ、にんきもの！」

実「はっはっは」

翔「やっぱオール1にしてあげるよ」

実景の容姿は、赤茶に髪を染めている。
身長は155センチ。

ブレザーの制服を思いっきり改造している、なかなかの不良。

醜「俺の影響力って凄いな」

実「本当だよ」

梓「まったく…部活でのコンクールのために制服を2着買うハメになった藍堂家のお財布状況、どうしてくれるのよ」

翔「だから姉貴の肩たたきしてるんだろ？」

棗「渋いな」

藍堂 醜哉だいや

藍堂家の三男。

1996年8月25日生まれの乙女座。血液型はA。

棗「ぎゃははは！あの醜哉が乙女座だぜっ」

翔「くっ…本当、笑うしかないよね…はははっ！」

梓「見た目のギャップが素晴らしすぎるわ」

実「…ティッシュ、いる？」

実景と同じ中学に通う、高校1年。

部活はサッカー部で、期待のエース。成績は上の上。

翔「サッカーは去年始めたばかりだったよね」

棗「若いモンはいいなあ！」

梓「年寄り発言は控えてほしいわね。私も棗吾と同じになるから」

双子ですもんね。

サッカーやっているだけあって、持久力はズバ抜けて高い。球技が得意分野。

実「最近は昼休みバスケットしてるよね」

醜「みいもいるだろ」

梓「アンタたち姉弟でバスケットしてたの？」

バスケットしている姉弟たちには誰も近づかない。だって三崎市一の不良がいるからだ。

醜哉はとにかく不良の塊。髪は銀に染めてるは、左耳にはピアス付けるは。

醒「みいだって、どっちかっつたら不良だろ」

実「醜哉に影響されたんだけどね」

棗「お兄ちゃんはその子に育てた覚えはありませんっ！泣いちゃ

うぞ。いいのか？ほら、目元見てみるよ」

翔「兄貴は馬鹿の塊だ」

梓「そしてシスコンの塊ね」

醒哉は、髪を銀に染め、左耳に2つの赤と青のピアスを付けている、三崎市一の不良。

身長は164センチ。

学ランの下にはいつもTシャツ。ベルトはなんか厳つい。

実「ほんと、意外と喋りやすいのに皆見た目で判断するから近寄らないんだよね」

梓「醒哉はいじりやすいのに」

翔「そう思ってるのは姉貴だけだよ」

藍堂 凜^{りん}

藍堂家の末っ子。

1999年10月29日生まれの蠍座。血液型はO。

棗「凜！こっち向いてくれ」

凜「なに？」

棗「今日も可愛い……」

実「凜から離れるつつつてんだろおがあああああ……！」

梓「凜、こっちおいで！安全圏だから」

棗「ちつ…実景！お兄ちゃんがハグを…」

醒「いい加減にしるよ、棗兄。みいは一応目エ付けてるんだぜ」

実「何さらつと言ってんですか!?!」

醒「クラスの女子には飽きたし…」

実「この不良野郎っ!!!!!!」

翔「なんでこの家はまともな奴が僕しかいないんだ」

凜「しょう兄ちゃ、アブノーマル」

翔「……………」

藍堂家にまともな人はいない。

凜もまともそうに見えるが、4年生にしては幼い。見た目とか、言葉遣いとか。

正直、将来が不安な子でもある。 梓論

凜は、黒髪のツインテール。いつもイチゴのゴムで結んでいる。身長はとにかく小さい133センチ。

実「凜は本当に小さいね」

翔「やっぱり僕はまともな人間に入る部類だと思う。兄貴や醒哉みたいな変態馬鹿じゃないからね」

棗「俺は変態じゃねえ！」

梓「馬鹿は否定しないのね」

醒「でも事実だぜ？」

実「やめる醒哉…なんか本当に恥ずかしくなってきたから」

凜「凜もはずかしー」

翔「何だよ」

オワレ

2 藍堂家ノぶろふいーる（後書き）

えつと…まず、すいません！

すっごいグダグダになりました……

醍哉のまさかの実景スキ発言！

スキっつーか、本当に

タイプなだけです。

3 マジカルバナナ！その巻

4月22日、日曜日。

この日は、藍堂家全員が暇をしていた。

理由は、台風。

普段部活があるはずの日でも、今日はどこも休みだ。

「あー、暇だわ」

ネイルしながら梓が言う。

「あず姉は爪いじってるだけいいだろ。俺なんてマジで暇だぜ」

「醒哉静かにしなさいよ！やべ、ミスったわ……チッ」

梓は舌打ちをして、爪にフウーと息を吹き掛ける。

醒哉は部屋を見渡す。梓はネイル、棗吾は相変わらず凜にべったべた、翔太は中間に向けて勉強、実景はコンクールに向けてフルートの練習。

「飽きたっ！もうコンクールなんて知らない」

「いきなり大声出すんじゃないわよ。またミスったわ」

「何もかもミスっちゃえ！」

「実景、静かにしてくれる？計算ミスするから」

「だから、ミスれ！」

暇さのあまり、実景が暴走し始めた。

「よし！みんな暇ならゲームをしよう」

凜にべったべたしていた棗吾が、いきなり言った。

「ゲームって何よ？」

「マジカルバナナしようぜ」

「醍哉がマジカルバナナやりたいなんて意外だね」

翔太がシャーペンを机に置いて醍哉を見る。

「最近俺のクラスでハヤってたんだ」

「マジカルバナナ！やろう！よし、ここは長男の俺からな。次に梓だ」

（嫌な予感するんですけど！？）

実景はこっそり思った。

マジカルバナナ〜1回戦〜

「はい！マツジツカッルツバナツナツ！」

「何で兄貴はそんなにノリノリなんだい？そして読みにくいよ」

頭の上で手を思いつきり叩く棗吾に対し、冷たい目を向けながら翔太が言う。

「バナナといったらた…」

「しゃらあああああつぷ！！！！！」

近くにいた実景が棗吾にアッパーカットをくらわす。

「ぐはっ！何するんだ実景」

「下ネタ禁止！はしたないっ！変態っ！キモイ！」

一言言い終える度に、ゲシゲシと蹴る。

「だから棗吾ってイヤ！実景、私も加戦するわ」

梓は腕をまくり、「乙女の敵っ、死ねえ！」と言いながら顔面を殴りつける。

「おとめのてきー！」

2人に混じって、凜もおふざけで棗吾をポコポコ叩く。

棗吾、脱落。

棗吾が脱落……梓、実景、凜からの一方的な攻撃によって戦闘不能。2番手の梓からスタート。

そして、棗吾のような事がないように、最後まで勝ち残った人は1週間家事の免除。料理当番、洗濯、掃除、翔太と凜のニングコー
ル。される事になった。

残り、5人

マジカルバナナ〜2回戦〜

「マジーカールーバーナーナ！」

梓の掛け声で、全員が真剣な表情になる。1週間の家事免除は、キョウダイたちにとって、とても大きいものだ。

棗吾ドンマイ！BY梓

「バナナといったら、き・い・ろ！」

（（ふっつー！））

実景と醒哉は、梓の普通すぎる黄色に軽く白目を剥く。

「黄色といったら…タンポポ」

（うそーっ！）

（あの翔兄が、悩んだ末に出てきた黄色がタンポポ!? 傑作だぜ）

(翔太…やるじゃない)

翔太の次は3番手の実景。

「タンポポといたら、き・い・ろ！」

「みい姉ちゃ、黄色2回目っ」

「はいアウトオオ！残念無念また来週了」

梓が愉快そうに言う。それはそうだろう。なんたって1週間家事免除がかかっているのだ。

「あつ！い、今の無しの方向で……うん。だよね、あたし死んだわ」

凜を除く3人からのキツイ視線で実景、脱落。

(洗濯なんて絶対イヤ！なんで私が野郎共の下着触らなきゃいけないのよ！？)

(僕の優勝が見えてきたね)

(もしかしたら俺優勝できるかもしんねえ)

(朝起きれないから、絶対お料理当番とかお洗濯とかやりたくないよ…凜、がんばろ！)

残り、4人

ただの暇つぶしで始めたゲームが、まさかの展開になってしまった。しかも、言いだしっぺの棗吾が1番に脱落という、なんとも残念な結果になった。

次は、醒哉から始まる。

マジカルバナナ〜3回戦〜

「マジカルバナナッ！」

その瞬間、リビングには緊張した空気が張りつめる。

「ねえ、棗兄…あたしたち暇だね」

「俺と愛をはぐくむか？」

「棗兄に話したあたしが馬鹿だった。今の忘れて」

「お前ら！この空気ブチ壊すな」

「君たちみたいな人間を世間はKYって言っただよ」

「なあんか脱力〜」

「あうう…今ので凜…眠くなっちゃったよお」

凜はその場で寝てしまった。

残り、3人

「え、今のカウントしちゃうわけ？」

寝てしまった凜をソファに寝かせ、棗吾と実景の口にはガムテープが貼られた。

「ふがふがふんが、ふがふがふがふう！」 訳：梓にやられるなんて、屈辱的だ！

「テメエ棗吾！学校からガスバーナー持ってきてその口炙るわよ」

「ふが！？」

（マジでやりそうなんだけど…）

さらに、ゲームをやっている時に妨害するかも…という想定のもと、手足にロープを巻きつける。

（訳わからんわっ！ 翔兄がなんか楽しそうなのはあたしの目の錯覚！？）

「いい眺めだね」

（やっぱりねっ！現実だったよチクショー）

ロープは、身動きが取れないほどにきつく堅く結ばれてある。ロープが手足に食い込んで、かなり痛いはずだ。

実景の瞳に、うつすら涙が溜まる。

(冗談抜きで痛いっ!!)

「泣いてるみたい、かわいいぜ」

(醍哉ああああ!何も言うな…言われなれてないんだって!!)

「いい眺めだね」 2回目

(翔兄…負けてあたし達と同じ気持ち味わえ。そして2回も同じことと言っなっ。泣けるから…あ、もう泣いて…泣いてないからっ)

「ごめんね実景…でも、これも私たちの戦いのためだから…っ!」

(3人の楽しみのための間違いだよ)

「……………」

誰も棗吾に絡まないのは、面倒な事になるからだろう。

「むにゃ…バナナといったら……わさび、」

「ふがあああ!ふががああああああっ!!!!」 訳…りいいいん!
!かわいいぞおおおおっ!!!!

「いい加減にしなよ兄貴。呆れを通り越して感動を覚えるよ」

2人を拘束し、の位置に戻る。

3 マジカルバナナ！その巻（後書き）

1話で終わると踏んでいたんだけど…無理でした、ハイ。

4 マジカルバナナ！その式

マジカルバナナゲーム

脱落者 棗吾、実景、凜

生存者 梓、翔太、醍哉

優勝商品 1週間家事免除

4回戦目は、醍哉 梓 翔太の順番でゲームが始まる。

マジカルバナナ〜4回戦〜

「マ・ジ・カ・ル・バ・ナ・ナ！」

この瞬間、3人の目つきが一気に変わる。

「バナナといったら、く・さ・い」

（バナナの存在否定したよ。いや、嫌いだから当然なんだろうけど）

「臭いといったら、そ・う・こ」

実景は棗吾をチラッと見る。

（あ、ショック受けてる）

そこには、軽く白目を剥いた棗吾が横たわっていた。

「棗吾といったら、ヘンタイ馬鹿」

翔太の容赦ない言葉に棗吾はさらにショックを受け、身をよじり脚でつついてみても反応がない。

(これぞ、生きた屍!) 失礼

「ヘンタイ馬鹿といったら…え、棗兄しかいなくね!？」

「その気持ちは大いに理解できるわ…でも、醒哉脱らああああく!!!」

梓はロープを握り、翔太はガムテープを手に取る。

「う…うわあああああああ!!!」

数分後、口にガムテープ、手足をロープで拘束された醒哉が完成した。

「ふがああああ!!!」 訳：痛えええええ!!!

「うん。最高な眺めだね」

翔太はそう言い、凜の方に目を向ける。

(絶対凜も拘束しようかなって考えてる目だっ)

「姉貴、凜はいいのかい？」

(ほらね！ほらねほらね！この鬼畜っ)

「首輪つけようか、実景？」

(だよ。翔兄は全然鬼畜じゃない)

残り、2人

「翔太、悪いわね。この勝負、私が勝たせてもらうわ」

翔太を上から見下ろし、ふん、と鼻で笑う。

「姉貴が勝つ？有り得ないね。勝つのはいつでも僕だ」

そんな梓に対抗し、挑発する。

2人の間に、火花が散る。

マジカルバナナ〜5回戦〜

「マジジーカールーバーナーナ！」

いつになく真剣な梓の声音に、思わず実景と醜哉は笑いそうになる。

「バナナといったら、さーる！」

「猿といったら、哺乳類」

「哺乳類といたら、にーんげん！」

「人間といたら、愚か」

（ええええええええええ！？翔兄も人間じゃん！愚かじゃん！！）

「愚かといったら、そーごー！」

（結局、棗兄に行くんだな、あず姉は）

「棗吾といったら、メガネ」

「メガネといったら、萌えっ！」

「もっ……………！？」

翔太に「萌え」というのはプライドが許さなかったのだろう、「も」
だけ言つて口を堅く結んでしまった。

「っしやああああああ！！」

梓は拳をこれでもかというくらい高く上げ、勝利の雄たけびをあげ
ている。

「私は1週間自由だああああああああ！！！！」

「くっ…この僕が、負けた…？」

「萌え」を言えなかっただけ。

そして、梓はガムテープとロープを手に取る。

（え、やるつもり？）

「じゃあ…勝負に負けた翔太くん、大人しくしていなさいね？」

「……………」

ショックから立ち直れない翔太は、梓の声が耳に届いてなく、遠い目をし、「僕が負けた…？この僕が姉貴に負けた…？」と呪文のように繰り返している。

数分後

「むぐつ！？」

正気を取り戻した翔太は、今の状況に頭が追いつかないようだ。

（まさか…姉貴！？）

梓を見ると、優雅に紅茶を飲んでいる。

「あゝ！最高だわ…！最高に最高だわ！！」

醍哉はつま先でチョン、と翔太をつつく。醍哉は2回頷くと、「んがんが」と言った。

（ドンマイ…だと？ 醍哉、後で覚えてろ…………）

(つーか、いい加減縄ほどいて欲しいんだけど…)

駄目でもともと、略して駄目もとで声をあげ、梓を呼んでみる。

「んーんー！」

「なに？実景」

運よく、梓は実景に近づく。

「んん、んんんが！」訳：縄、ほどいて！

「縄、ほどいて！…って言うてるのかしら」

一字一句間違えないで言い当てた梓に、実景は勢いよく首を縦に振る。

「んん…今ほどくのはもったいないわね」

(なにが！？　つか、縄！痛い痛い痛いっ！…！…！)

再び激痛がおそいかかり、また涙が溜まる。

必死の懇願と、涙のパワー()により、やっと縄を解いてもらった。

(うわ…ガムテープ取るのこわっ！)

「ガムテープを取ってあげるわね」

「ブリッッ！！！」

「いっ！っ！？！？」

いきなり、思いっきり、剥がされた。

あまりの痛さに、口元を両手でおさえ、その場につずくまる。

「~~~~~っ」

(……………)

(みい、ドンマイ。そしてつずくまってるみいウケる)

「あらあら、大丈夫？」

(確信犯っ！！)

「で、解いてもらいたい人は？」

「「「……………」」」

「そう？じゃあ私は有意義な1週間を過ごさせてもらっわ」

鼻歌しながら、軽快に階段をのぼっていく。

その後、棗吾・翔太・醍哉は実景に丁寧に開放された。

その日以来、藍堂家でマジカルバナをする日は永遠になかったのは、言うまでもない。

5 お花見に行きましょう

「私、重大なことに気付いたわ」

マジカルバナナゲームから、3日経ったある日の夕食時間。不意に梓がそんなことを言った。

「なんだよ。あず姉、まさか今日から家事当番やってくれんのかよ？」

ご飯を口に運びながら、醍哉が問う。

「この柔らかい飯は、棗兄が炊いた米だな？」

醍哉は、不服そうな顔をしながら棗吾を睨み、

「もちろんだ。凜にも食べやすいようにだな、兄として考慮しているんだぞ」

棗吾は、メガネのフレームを持ち上げ傲慢気に、

「柔らかすぎるね。ご飯というよりお粥だ」

翔太は、嫌味を言いながら棗吾のすねを蹴り、

「ねちよっててキモい」

実景は、顎を軽くしゃくらせながらご飯をかき混ぜ、

「そうかなあ…食べやすいと思うよ?」

凜は、スプーンで掬いながら棗吾にエンジェルスマイル。

「聞いてた? 私、重大なことに気付いたわって言ったのよ」

「聞いてた? 俺、あず姉、まさか今日から家事当番やってくれんのかよ? って言ったぜ」

「そうだそうだ、と実景が言う。」

「なワケないじゃない。私たち、今年……」

「今年、なに?」

梓が間をため、翔太が早く言えと言わんばかり先を促す。

「花見してないわ!」

「!?!?」

衝撃を受けたかのように、棗吾と凜が箸を落とす。

「たしかに、してなかった気がする」

「馬鹿ね実景。気がするんじゃないよ、してないのよ」

「ふーん、と言いながら味噌汁を啜る。」

「じゃあ決行は、今週の日曜日だ。各自それぞれ準備しておくように」

棗吾が言うと、梓と凜は嬉しそうに返事をする。

「兄貴、1ヶ月後テスト」

「あたしフルートの練習が」

「俺その日部活」

「そうかそうか。休め！ 花見だ花見に行くぞ」

その後、凜からの必死の懇願で渋々承諾した3人だった。

そして向かえた花見当日。

藍堂家はバスに乗り込み、少し離れた大きくて広い花の丘公園へと出発した。

「あ、凜が寝ちゃったけど」

バスに乗り込み、早々藍堂家の眠り姫こと凜が寝たことに実景が気付く。

「うむ。寝顔もかわいいな」

「棗吾死んでくれない？」

「どうすんだよ。凜は寝たら起きねえぜ」

「兄貴が担ぐに決まってるじゃないか」

「俵で使うような表現のしかたはやめたら？」

「じゃあ、実景が凜を運べばいいよ」

翔太はため息をつきながら言う。

「凜は俺が運ぶんだ！」

いきなり立ち上がり、大声で宣言する。

「次は〱花の丘公園前〱……」

ピンポン！

「やрийい！あたし反射神経いいわ」

「みいは子供だな。そんなところもかわ……」

「バツ、もういいから！」

そんなこんなでグダグダしているうちに、目的の場所まで到着。

「凜は俺に任せろ！皆は荷物を頼むっ」

どごそのアクション映画のような楽吾に対し、皆は無視する。

「着いたわよ！」

一番にバスから降りた梓は、嬉しそうに言う。

「場所探しは、実景と醍哉ね」

藍堂家恒例行事。それは、実景と醍哉による場所確保。2人があちこち走り回り、ベストポジションを見つけだす。

「ん。あず姉、荷物よろしく」

「毎年毎年メンドイぜ」

実景は梓に、醍哉は翔太に荷物を渡し、走りだした。

場所探しに走りだした2人は、ある重大なことに気がついた。

「桜がねえ……」

「先週の台風のせい？」

そう。先週訪れた台風で、桜の花びらがほとんど散ってしまったのだ。

「あ……あそこはまだ桜が残ってる」

実景が指さした先には、大きな桜の木。他の家族もいるが、反対側を陣取れば問題はない。

2人はその場所へ行き、携帯で棗吾たちを呼ぶ。

5分後

「うん。なかなかいい場所を見つけたわね」

桜を見上げ、満足そうに頷く梓。

シート敷いて荷物を置き、靴を脱ぎ座る。

時間はまだ10時。お昼にするにはまだ早い時間給だ。そこで、時間までなにかする事になった。

「つか、みんな何持ってきたわけ？」

お菓子をつまみながら、実景が言う。

「私バドミントン」

「お約束じゃねえか」

鼻で笑う醒哉に対し、梓はムツとなる。

「じゃあ、醒哉はなにを持ってきたのよ？」

「俺か？ もちろんサッカーボールだぜ」

醒哉は自信気に少し胸を張る。

「このサッカー少年！」

梓は、あまり悪口といえないような悪口を言う。

ちなみに、棗吾は一輪車（凧に教えるため）、翔太は勉強道具とバトン、実景はフルートと野球をする道具。そして凧は、おままごとセット。

「え、凧てばそんなの持ってきたの？」

「うん！ みんなで、やりたいから持ってきたの」

「僕は嫌だ」

「あたしも……ちょっと遠慮したい」

「俺も」

翔太、実景、醍哉の反対の声を聞き、梓は凧に近づくと目線を合わせるために座る。

「凧、今日は他のこととして遊びましょ？」

納得がいかないのか、頬をぷくつと膨らませる。そんな凧を見て、棗吾がデレデレになる。

「じゃあ、今度おままごとしてね？」

「ええ。また今度、みんなでしましょうね」

梓と凧が指切りをし、今日はままごと以外のことをする事に。

話し合い、話し合い、話し合った結果、藍堂家は鬼ごっこをするこ
とになった。

幼い凜が鬼になったら不公平ということで、凜には“鬼になったらタッチをせず、次の鬼を指名できる”というハンデを与えることになった。

さらに、鬼をタッチ（凜の場合は指名）する際、その人が連続での鬼にならないようにする。自分が鬼になってから、3回鬼のチェンジがあれば、その人をタッチできるようになる。制限時間は30分。翔太のつけている腕時計のタイマーが鳴り終わったら終了、最後に鬼だった人が負けた。

「ルールはこれでいいな？」

棗吾の確認する声に、全員頷く。

「ルール違反者と敗者は3日間の家事当番だ」

すると全員が目つきが変わり、闘争心を沸かさせる。

「ジャンケンで負けた奴が鬼だ。鬼になったらゆっくり10秒数えること」

棗吾がジャンケンをするためにグーを出すと、みんなも倣いグーを出す。

「よし……最初はグー！」

「ジャンケン」

「はあ……あたしジャンケン弱すぎ」

一番最初の鬼は実景。一発で完全敗北。実景チヨキに対して全員グーを出したのだ。

(まいつか。あず姉辺りすぐタッチできるし)

そんな事を思いつつ、実景は目を瞑る。

「数えるよ！ いーち、にーい、さーん……」

みんなの走る足音が聞こえ始める。

「しーい、ごーお、ろーく、しーち……」

やがて足音も聞こえなくなり、実景の音が響く。

「はーち、きゅーう……じゅっ……」

鬼ごっこ、スタート。

つづく

5 お花見に行きましょう(後書き)

次回は藍堂家のサバイバルです

6 平等鬼ごっこ(前書き)

ちょっと長くなりました…

最後まで読んでくれたら嬉しいです))

6 平等鬼(ごつこ)

「実景が動き出したぞ！」

稗吾の掛け声に、梓と凜がキヤツキヤと騒ぐ。

「ボコボコにしてやるよ」

「みいのキャラが変わったぜ！」

醍哉の掛け声に、梓と凜が色んな意味で騒ぐ。

「鬼はボコボコにする権利は一切ないよ」

「正論！ 正論だけど路線ズレてるぜ翔兄」

なんかズレている翔太に、醍哉は冷静にツッコむ。

「あず姉死ねえ！」

と実景が叫びながら、ターゲットを梓に定める。

「生きる！」

と実景に返事をしながら、必死に逃げ回る。

「違う…なんか違う！」

2人の会話に痺れを切らしたのか、棗吾が珍しくツッコミの立場に入る。

その間にも、実景と梓の間は縮まっていく。

「っしや！ あず姉タッチ」

実景は梓を背後から余裕のタッチをする。

「最初に私を狙うなんて卑怯よ」

「凜じゃないだけマシだと思ってよ」

実景がジト目でそう言つと、棗吾が割って入る。

「そつだぞ梓！」

「棗吾テメツ、凜のことになると本当にうるっさいわね」

などと口論しつつ、鬼は実景から梓へと変わった。

「鬼になったら3秒数えろよ」

という、棗吾による新たなルールが追加され、数え始める。

梓の近くにいた棗吾と実景は、できるだけ離れようと猛ダッシュで逃げる。

数え終え、棗吾に向かってダッシュ。そんな梓の顔を見た棗吾は背筋が凍る。

「^{ケモノ}獣が…獣がいるぞおお！！」

「^{ケタモ}棗兄は獣じゃんか」

「さらりと上手い事言ったね」

棗吾を哀れむように言う実景に対して、翔太は誉める。
梓は運動神経はいいが、短距離はあまり得意ではない。一見、不利にみえる鬼ごっこでも勝算はある。

それは、長期戦に持ち込む事。

いくら短距離が得意でも、全力疾走で何分も走るのは不可能。そう…作者の友加みたいに。

そこで梓は、ターゲットを地味に追いかけて、くたばった所でタツチ という作戦に出た。

なぜ、棗吾がターゲットなのか。ただ単に嫌いだから、という理由と、翔太は陸上部で醍哉はサッカー少年。2人とも、長距離は得意だから。

凜を狙う手もなくはないが、なんか気が進まない。

「これを機に死になさい、棗吾おおおおお！！！！」

「冗談抜きで恐れ！」

目をギラつかせ、今までに出したことないくらいの速さで棗吾に迫

る。

「あ、あず姉ちゃ……「ワイ」

「あず姉の目、イッてるぜ」

「ホラー映画を見てるみたいだ」

「棗兄、南無」

と、キョウダイたちは思ったことを口にする。

今日の梓は速い。とにかく速い。どれだけ棗吾のことを毛嫌いしているかは分からないが、梓の眼中には棗吾しか映っていない。

「棗吾お！ 大人しく死になさああああい！！」

「俺は捕まるわけにはいかないんだ！」

2人の会話が、噛み合ってるようで噛み合っていない。

棗吾は、走りながら後ろを振り向き梓を見る。

「凜が見てるんだぞ！？ 捕まる姿は絶対見せん！」

そう叫び、今度は左の方 凜がいる方を見る。

「俺は絶対逃げ切るぞ……凜、見ててく」

と言いかけて、ちゃんと前を見て走っていなかった棗吾は、木の幹

に勢いよくぶつかる。

「うわ、ダセエ」

醍哉が思わず漏らす。

そして、梓は最大のチャンスを逃すことなく棗吾をタッチ……とい
うより拳をくらわす。

「ぐはあっ!」

顔をグーで殴られ綺麗に吐血、鮮やかな棗吾の血は眼鏡と一緒に
宙を舞う。

「凜、あれが棗兄の赤血球だよ」

「せっけっきゅう?」

実景の言葉に首を傾げる。

「血のことだよ」

翔太がゆっくり歩きながら2人に近づく。

「つか、なんで赤血球?」

醍哉の問いに一言、

「なんとなく」

(つまんねえ！)

と醒哉は思ったとか思ってたとか。

「殺ったわ！ ついに棗吾を殺ったわー！！！」

ノックアウトした棗吾の屍を見てはしゃぐ梓。

鬼ごっこから、かなり線がズれていることに気付かない。

「棗兄ちゃ……走れるの？」

不安そうに凜が言くと、誰かが答える前に棗吾が立ち上がる。

「もちろんさ！ 俺は走り続ける漢おとこだからな」

「最高にダサイよ！ さすが棗兄だね」

「みい、テンション変だぜ」

などとやっている間に、残り時間はあと10分となった。

生き返った棗吾は、3秒数え始める。

「僕思っただけど、」

逃げながら翔太が言う。

「なにを？」

棗吾をノックアウトさせた梓は清々しい顔で聞く。

「兄貴が凜をタッチする確率が3ケタきれるか」

「無理だな」

即答で答えたのは醜哉。

「もしかしたら実景のことタッチするんじゃない？」

「それはないよ。あたしが鬼になるのは、棗兄が鬼じゃなくなったときだから」

梓は納得したように頷くと、凜にドンマイ、と言いながら頭を撫でる。

撫でられた理由がイマイチ分からない凜は、ただ嬉しそうな顔をす
る。

「ああずさあああああ！！ 凜から離れるおお！！！！」

砂ぼこりをあげながら目をギラつかせた棗吾が迫る。相変わらず凜
が好きなシスコンである。

「チツ 生きてたのね」

当たり前。

今の棗吾は、凜にべったりしている梓にしか眼中にない。よって、
凜から梓を剥がそうとしているのだが。

「凜から離れるお！」

走ってくるなり、梓の腕を掴んで凜から離す。

「わっ!?!」

まさか自分が掴まれるとは思っていなかった梓は、地面に尻餅をつく。

「やばいよ アレ、絶対あず姉怒る」

「いい様だよ。それより、鬼ごっここの敗者は兄貴でいいよ」

ルールを破って梓をタッチしてしまったから。

「そうだな。……にしても、棗兄もよく懲りないよな」

3人の視線の先には、梓に殴られ蹴られている棗吾がいる。

「……棗兄ってさ、ああされてるけど、仕返しとかしないよね」

「そうだな」

「やっぱり、そこにさ ……」

実景の言葉は、その時吹いた風によってかき消される。

「なに、何て言ったんだい？」

尋ねてくる翔太に顔を赤くさせながら、

「な、なんでもいっ！何も言っていないし」

と言っ。

とにもかくにも、この鬼ごっこは棗吾の負けとなった。

棗吾を除く5人は、軽い足取りで荷物を置いた場所へと戻る。

「花見の本番はこれからよ！」

「オーツ！！」

梓と凜の声が、響く。

つづく

6 平等鬼ごっこ(後書き)

お花見の話はまだまだ続きます。
長いですね

次話は、藍堂家のランチタイムの予定です！

7 始まりは些細なことから

鬼ごっこを無事終了した藍堂一家は、陣取った場所へ戻る。

「3日は自由だぜ！」

「本当に。 棗吾つたら…ダサイわね」

「あれは不意討ちだ。見事に当たったね」

「あんな事する人いるんだねえ！ 棗兄、漫画から飛び出したキャラみたい」

梓、醍哉、翔太、実景は大声で笑う。

「カッコ悪かったけど、棗兄ちゃ…かわいそう」

凜が泣きながら言う。

「マイエンジェル凜…！」

棗吾は感動のあまり、目尻に涙が浮かぶ。

「まあ、たしかに痛そうだったよね 色々」

実景は、梓をチラッと見る。

「実景…！ 心配してくれてるのか…」

「しし、心配!? するワケないじゃん馬鹿!」

腕を組み、そっぽを向く。

「みいのツンデレかわ……」

言い終わらないうちに、醜哉の口を手で押さえる。

「言つな、それ以上言つな!」

そんな顔を真つ赤にさせられてもと醜哉は思った。

ぐぎゅるるる

誰かのお腹の音が鳴った。

「……誰? 言つとくけど、あたしじゃないからね」

「みいじゃねえな。違う方から聞こえたぜ」

「私でもないわよ。まさか、棗吾?」

「俺でもないぞ。凜は食べべ」

左右から梓と実景のパンチが飛んできて、棗吾は奇声をあげながら倒れる。

「凜でもないよ?」

5人は翔太の方を見ると、

「いないじゃない」

「おい、翔兄一人で飯食ってるぜ」

醒哉の言つとおり、翔太はシートの上に堂々と胡坐をかいて座り、弁当を食べていた。

「何してるんだい？ 遅いからさき食べてるよ」

卵焼きを頬張りながら言う。

「翔太…腹、減ってたんだな」

「朝飯食べてなかったもんね。そりゃ減るよ」

「同情するような目とコメントはやめてくれるかい？ お茶ぶつかけるよ」

少し眉を寄せて、お茶の入ってるペットボトルを手に取ってはキャップを外す。

「やれるもんならやってみ……」

「ふうん、そう」

ニヤリと笑った翔太は、棗吾の顔面に向けてお茶をぶちまけた。

わなわなと震える棗吾。だいぶ頭にきたみたいだ。

「ふん、これぐらいのも避けられないなんて……」

バシヤッ

右手に梓のアップルティー（最近のお気に入りらしい）のペットボトルを空にさせて持っていた。

一方翔太の全身には、梓のアップルティーがかかっている。

「あああああつ！！！？？」

声をあげたのは梓。梓は顔を真っ青にして、両手を頬にあてている。

「わ、私の…アップルティーが……」

鬼の形相で棗吾を睨み、乱暴に胸ぐらを掴む。

「テメエ等のやり合いに私のアップルティー使っんじゃないわよ、クソが！」

「たかがアップルティーでそんなに怒るなよ！」

「ああん？ たかが、なに？」

反発した棗吾だが、容赦なく跳ね返される。

「あず姉大人げなっ」

実景がポツリと呟く。

「ちょっと、僕にまでアップルティー飛んできたんだけど」

(面倒になるから余計なこと言っな!!)

という醒哉の願いも虚しく、翔太も梓に突っかかる。

そこからの3人の浅はかな言い合いは、放送禁止用語が連発で発せられ、実景は凜の耳を塞ぐ。

「聞いたら駄目だよ、凜」

「うっ!？」

そんなことをしている間にも3人の行動はエスカレート、梓が翔太に向かってサッカーボールを投げる。

「そのくらい、簡単にかわせるよ」

そのままサッカーボールは弁当箱に直撃、卵焼きやらタコさんウィンナーやらが散らばる。

「ちっ、おい! サッカーボール投げるとか馬鹿だろ!! 食いモンねえじゃねーか!!」

食べ物の恨みは恐ろしい。

食べ盛りの醒哉にとって、許しがたいことだ。

「あず姉! 一発殴らせろ」

と、3人の争いに醍哉が加わり凄まじいことになっていく。

「年下が私のこと殴るなんざ1年早いわよっ」

(短っ!!)

ツッコむのも実景だけで、梓のツッコミどころ満載の台詞には耳に届かず。

「年なんて関係ねえな！ 殴らせる」

「年下の梓は、よく俺を殴るよな…?」

「この前のマジカルバナナの屈辱……忘れてないよ」

梓ピンチ。

危機を感じた梓は、3人から逃げようと走りだす。

「逃がすかつ!」

醍哉はサッカーボールを蹴り、梓の背中に見事当てる。

「痛あ!?!」

ボールが当たった衝撃と痛さで、前に倒れこむ。

ドサッ

バキッ

(心から恐ろしいと思う…)

(フルートだけでこんなに怒るんだね)

「ゴルア、誰だフルートだけで怒るって思った奴？」

犯人は翔太だが、名乗り出ない。隣に座っている棗吾が、気付かないように翔太をつつく。

(触らないでくれる？兄貴)

(早く自首しろ、自首！！)

「まあ、いいや」

深く追求するのをやめ、ホッと一息つく棗吾。

「ところで、あたし来月部活で演奏会あるんだよね」

嫌な予感がした4人は、息を飲む。

「あたしのフルート、弁償よろしく。丁度新しいの欲しいと思ってたんだよね」

実景は上機嫌になり、鼻歌を歌いはじめる。

「安物なんて買わせないよ。買いに行くときは、必ずあたし誘ってよね」

「なんで僕たちが……」

翔太がポロリと本音を零すと、実景はキレイに折れたフルートを突き出す。

「高かったの、フルート。あたしの貯金全部使って、棗兄やあず姉にもお金出してもらったの」

フルートの値段は、20万円。10万円を実景が出し、棗吾と梓が5万円づつ支援して買った大切なものだ。

藍堂家のお財布状況は謎だ。

「もちろん、買わないなんて言わないよね？」

梓顔負けの黒い笑顔を向け、無理矢理頷かせる。

（みい強っ！）

（あの翔太に脅迫が通用したなんて　　）

（実景、俺たちが買ったフルートをそんなに大切に……！）

さすが棗吾と言うべきか、シスコン発言万歳。

その後、話しはまとまり土曜日買いに行くことに。

散らばったものを片付け、梓と翔太にコンビニへ弁当を買いに行かせた。

「買ってきたぜ」

「あ、ちなみに私のはこのメロンパンとパスタ」

「俺のはカレーだぜ」

「待って、僕はカレーを食べたいから醍哉はこっちでも食べてなよ」

「俺はそれを食いたい！」

「あ、それあたしも食べたいし。 棗兄、醍哉。 引っ込んでろ」

「凜、メロンパン食べたい！」

「いくら凜でもメロンパンは譲れないわ」

「はあ？ 翔兄、カレーなんか食いたいわけ？」

「カレーを馬鹿にする醍哉は、食べる権利なんかないね」

「やだ！ あたしはグラタンが食べたいの。 棗兄はうどんでも食べてよ」

「グラタンは俺のために誕生したんだ！ 実景がうどんを食べ」

「こっぴなったら…さんましかないわね！」

「いーよ。凜、絶対勝ってメロンパン食べる！」

「しょうがないね…じゅげむで勝負だ。ストップウォッチがあるからそれで測ろう」

「やってやるっじゃん。俺が勝って、翔兄はポテチでも食ってな」

「戦争で勝負だよ！先に痛いつて言ったら負けだから」

「さすがの実景でも手加減するつもりはないからな」

お花見に行っても、藍堂家はにぎやか。

「っしやああ…！！ グラタンの神があたしを選んだっ！そして微笑んでる！」

っづく

7 始まりは些細なことから（後書き）

最後、無理矢理終わらせちゃいました

藍堂家は、どこにいてもその場所が戦場になっちゃいます。

今回の戦場の始まりは、棗吾と翔太ですね。

うっん… 棗吾も馬鹿だ

なんか棗吾がMに見えてきた。くふ。

8 とある次女の学校生活（前書き）

な、長くなりましたorz いろんな意味で

気長に読んでください。

8 とある次女の学校生活

家事当番のない日のあたし 藍堂実景 は、7時30分に起きる。

「まだ眠いつつーに…」

起きて、必ず悪態をつく。眠いから。

もそもそとベッドから降りて、改造しまくった制服に腕を通す。

着替え終わると、今日の学校の準備をする。といっても、教科書類はすべて置き勉。いちいち持って帰るの面倒だし。学校で出された宿題やら、授業で使う特別なものを詰め込む。

スクールバックを持ち、いつもならここでフルートも持つ。

「…………壊されたんだった」

昨日起こったアクセシントを思い返すと、我が藍堂家の馬鹿さに思わず笑みがこぼれる。

「新しいの買ってもらえるからいつか」

階段を降り、リビングに入ると翔兄と凜以外は揃ってた。

……………いつものことだけど。

最近、藍堂家では特別な用事がないかぎり、食事は一緒にとるようになっている。

「おい、誰か2人叩き起こしてこいよ。飯食えねえじゃん」

銀色に染めた髪を掻き上げ、醒哉が言う。相変わらずの不良っぷりで。

「凜を叩くのはいけすかないな」

メガネのブリッジをあげながら、棗兄が立つ。うん。こっちも相変わらずのシスコンっぷりで。

「朝っぱらからキショイのよ」

「あず姉、いつものこといつものこと」

棗兄に掴みかかろうとするあず姉を、あたしが止める。

りいいん！ 今からお兄ちゃんがお越しに行くからな！とか叫びながら階段を上がっていく棗兄。

相変わらずいい迷惑だよ。

「……翔太は誰がお越しに行くのよ？」

「あず姉が行ってこいよ」

「今年になってから、まだ翔兄も凜も起こしてないじゃん」

梓姉は舌打ちをし、「しょうがないわね…」とか言いながら凜を起こしに行った。別にしょうがないよね？そっだよな？

「あず姉ってよお、」

「うん？」

「セコイよな」

「うん」

そんな会話をしてたら、棗兄と凜が手を繋いでリビングに入ってきた。

「あう……おはよ」

「おはよ、凜」

「はよ」

相変わらず眠そ…いや、寝てる。さすが眠り姫。その名は伊達じゃない。

「きゃあああああああ！！！！」

「お、翔太が起きたな」

数分後、超不機嫌なあず姉と翔兄も交えて食事。

翔兄曰く、梓姉の起こし方は駄目らしい。

「よろしく。じゃあ俺は鍵持ってかないから」

いや、一応持ってけよ。

8時20分。あたしと醒哉、登校。

一步外を出ると藍堂家全員は注目的。ここらの地域では藍堂家を知らないものはいないくらい有名。あ、これ？あたしのダチ情報。

あたしと醒哉も例外じゃないっぽい。2人並んで登校すれば、自然と道が開くから。

これって一種のいじめ？ うん。違うよね。恐がってるだけだよ。でもあたしたちは周りに害を及ぼさない人間だし。向こうが勝手にあたしたちは不良で恐くてすぐ暴力ふるうって思い込んでる。そんなことしないのに。人は見かけによらないっていうし。

あ、醒哉も同じこと考えてるな。少し不機嫌そうな顔してる。

まあ、そんな感じで学校に着いた。1年と2年の下駄箱は一緒だから、まだ醒哉と一緒に。

「あ」

「あんだよ」

「しよっぱなから数学だ！」

「そりゃあ、よかったな。小テストあんだろ？満点取ってこいよ」

「無理。あたし死ぬから」

「はっ！死ぬもんか。今日のみいなら出来ると思っぜ？ 1位だる？」

「そ、そんな都合のいい話……」

「俺、日直だから教室行くわ」

じゃっ、と軽く手を挙げて先に行った。……絶対無理。

あたしは持ったままでいた上履きを下に落として、踵を踏んだまま階段を上った。

ガララ

あたしが教室に入ると、一瞬静かになる。一瞬だけ。で、その後はまたガヤガヤと笑い声とか響く。なんだかなあ。

「おっす実景、おはよ」

「今日も弟クンと登校？ 相変わらず仲いいね」

元気に挨拶してくんのはあたしの一番のダチ、いすみれな涼玲奈とわかやはるか若谷遥。

「おはよ。あたしと醒哉って仲良さうに見えるわけ？」

「は？ 何、今更」

映画のパンフから目を離して、玲奈があたしに言う。

今更ってなに、今更って。

「仲いいよ？ 昼休みだつてしょっちゅうバスケットかしてるじゃない」

唯一の常識人のハルからそういわれると、なんか反論できない。

「2人も一緒にやるじゃん」

「「実景に誘われてるから」」

……そんなハモらんでもいいよ。

「はい、席着けえ」

出席簿をひらひらさせながら担任の緑川（40歳男、理科担当）が入ってきた。

「せんせー！おはようございます」

「なんだよ、朝っぱらからうるせえな、山元」

山元隆輝^{やまもと くりゅうけい}。このクラスの……中心的存在？ なんかいつもヘラヘラしてる。

「それほどでも」

「山元、それ褒められてないぞ」

あたしの隣でこう言ったのが水井泰明^{みずいやすあき}。山元とツルんでる。

山元と水井のことを、みんなは“ヤマミズ”って呼んでる。

ちなみにあたしら3人は“凸凹トリオ”って呼ばれてる。あたしは不良（周りの人曰く）、玲奈はギャル、ハルは大人しめ系だかららしい。

気が付いたら一緒に話して笑ってたよ、うん。

「まったくもってその通りだ」

と、担任の緑川。まあ、そこでクラスは笑いに包まれる。あたし？ あたしは棗兄から届いたメールを読んでる。

（……え、今日の買い物当番変われ？ 実景のことが大す……）

ばっ、馬鹿兄！！ なんでこんなははは恥ずかしいこと言えるんだ！？ あ、醒哉もか。

「だ、誰がやるか馬鹿兄い！」

「藍堂、これで何回目だ？ 携帯電話がこっちに飛んでくるのは」

「覚えてないしっ！ それより先生、急遽買い物当番になったんだけど、どーゆうこと!？」

「知るか。とりあえず携帯は没収な」

「数字の小テストで満点取ったら返してよ」

「取れなかったら原稿用紙3枚の反省文な」

臨むとこ！ 朝の占いを今日だけ信じることにした。

「え、なんと小テストで満点が3人いるんだな。いつもより若干1人多い」

今は数学の時間。もう5分もしたらチャイムが鳴る。なんか無性に帰りたい気分なんだけど！

「まあ、いつも通り満点は須佐と橋本」

すさりょうた 須佐涼太。このクラスの学級委員長。みんなから頼りにされてる、優しくて判断力のあるヤツ。頭がいい。

もう1人の満点者が橋本弥貴。はしもとみき 学級副委員長。ちよつと口悪いけど周りのことをよく見て、行動力がある。わりと好きなキャラだったりする。

んで、須佐と弥貴ちゃんはお互い競い合ってる。っつーか、お互いライバル……？って思ってる。テストの成績とか、学級委員としての仕事とか、学校行事とか。

「……………」

あ、2人睨み合ってる。

「で、もう1人の満点者なのだが…驚くなよ」

なに、その前フリ。

「なんと……なんとなんと！ 藍堂実景！！」

驚くなっつーほうが無理だね、先生。だってクラス全員めっちゃ驚いて声あげてる。

「あ、まじっすか？ いやあ、今日占いであたし1位だったもんでやったね。あたし今日ツイてるよ！」

「どおした藍堂？ お前が満点なんてこの世から酸素がなくなるくらいスゲエぞ」

「先生、その例え方はひどすぎだと思います。あたしだってやるべきはやりませよ」

「先生、さっき実景が占いのおかげだとか言ってた！」

あ、このヤロー。勝手に言うんじゃないよ玲奈。

「そんな都合のいい話あるわけないだろ」

「空欄を適当に埋めただけですう」

先生は長い溜息をついた。でも事実だしね。適当にそれっぽい答え書いたら全部当たってた。すごいね、あたし。

「ほら、言つたる？ 今日のみいなら満点取れるつてな」

今は昼休み。あたしのダチと醍哉のダチでバスケ中。あ、ハルは応援係り。あたしら3人以外の前だと引つ込み思案になるから。ちなみに弥貴ちゃんとそのダチもいる。

「なんの根拠があつて…まあ、もう一生ないと思つけどね…」

醍哉がパスを受け取る前に、あたしがカット。

「ささ！」

「ん」

あたしは、弥貴ちゃんのダチのささ　　佐々木優子　　にパス。醍哉に鼻で笑つてやつた。

ささはドリブルしてゴール前まで言つたけど、醍哉のダチAとB（名前わかんない）に囲まれて弥貴ちゃんにパス。弥貴ちゃんは受け取つてすぐ玲奈にパスしてシュート。

ボールはしばらくゴールの縁んとこでくるくる回つて、ポストに入った。

「玲奈ちゃんスゴイ！」

ハルが拍手し、ピースをして応える。

「あの黒髪の子、かわいいよな。前から思ってた」

「ハルのこと？ 醍哉、手出したら殺すから」

まさか、と言って笑いながら醍哉のダチAたちの方に近づく。

その後は醍哉チームがゴールを決め、引き分けになった。いい汗かいたわ。

午後の授業は理科。

「先生！ 数学の小テストで満点とりました」

「おー、知ってるぞ。職員室で話題になったからな」

そんなに？

「こんなことは今回だけだな」

とか言いながらあたしの携帯返してもらった。

授業は真面目に受けてる。受けてるけど他のこともやってる。例えば…今みたいに、玲奈と授業中にメールとか。メールは大抵玲奈からくる。

んで、チョークが飛んでくる。あたしはさつとかわす。チョークは玲奈のおでこに当たる。毎度毎度痛そう。そして、クラスメイトの笑い声が響く。

こんな馬鹿やっていると、授業が終わるのは早くて。気がついたら教室にはあたし1人だけ。みんな部活やらでない。

あたしのクラスはみんな元気。いじめとか一切ない。みんな平等。仲良し。担任も悪くない。馬鹿。でもあったかい。落ち着く。

それが、2年2組！

うん、と1回頷く。スクールバッグを持って、教室を出た。

8 とある次女の学校生活（後書き）

9 話に続きます！

こんなに長くなるとは思わなかったZ E

9 とある次女の帰り道（前書き）

ちょっと長くなりましたZ E

最後まで読んでくれると嬉しいです^^

9 とある次女の帰り道

あ、どうも。藍堂家の次女、実景。

あたしは今、藍堂棗吾という名の馬鹿野郎でシスコンな兄貴からの頼みで、スーパーで買い物中。

今度あたしが料理当番のとき、棗兄が苦手な茄子の料理を振舞ってやろうと思う。だから、買い物かごには茄子がたくさん入ってる。

棗兄からのメールの内容には、今日買うもののリストがのってた。あたしはそれを見ながら、商品をかごに入れていく。

よし、全部入れた。後は…お菓子とかアイスとかも買おう。

……って、調子のってアレもコレもかごに入れてたら、山盛りになつてた。

「~~~~っ!」

かなり重い。レジまで後少し。気合いだ、あたし!

空いているレジの一步手前まで来たところで、ババアに横入りされた。すっげ腹立つ!

「ちっ…ざけんなクソババアあたしの後ろ並でろ」

って言ったらあたしに譲ってくれた。言ってみるもんだね。

お金を払い、袋に詰める。1袋で済んだけど…やたらとデカイし、重い。

よしっ。気合いだ、あたし！

袋を持つ。

「…………？」

なんか…軽く感じる……ような気がする。

「なんでこんなに買ってるの…馬鹿でしょ」

「し、翔兄！」

ため息をつきながら、翔兄が半分持つてくれる。

「なっ、なんでここに…」

「馬鹿な妹のことだからね…余計なものたくさん買って、荷物が重くなってるだらうと思って来てみたら……」

ば、馬鹿な妹！？ 翔兄は一言余計っ！

「案の定、君はこうしている」

「…………悪かったね」

「はぁ。まったく、端から見てて馬鹿にしか見えない。で、その馬

鹿が僕の妹なわけだよ」

あたしは、黙って翔兄の言葉を聞く。

「息を切らしながら家に帰ってくる姿を想像したら哀れに思えてね…こつやって半分持つてあげてるんだよ」

翔兄は普段すつこいイヤな奴だけど、たまにみせるこの優しさが好きだったり…。

「あああ哀れってなに！ つか、頼んでないし！ 1人でも帰れるし！」

また出た、あたしの悪い癖。こつやって優しくされると、素直になれなくて。

「ふうん。じゃあ、頑張つて」

いきなり手を離した。

「ひゃああっ!?!」

びつくりして、変な声が出た。普段のあたしじゃ考えられない声だったから、恥ずかしかった。ああ顔が熱い。

翔兄を見ると1人でスタスタと歩いていた。

コノヤロー。

恥ずかしかつたけど、1人で持てる重さじゃなかったから、意を決

して翔兄を呼んだ。

「しょ…翔兄っ！」

翔兄は止まって、振り向いた。

「…………なに？」

ちよつと待て。なんでそこはかたなく笑ってやがる。楽しいか！楽しんでるのか！？

「な、なにして…その…………」

あたしが言おうとしてること、分かってるよね！？ くの…S！

「早く言いなよ。じやなきや、帰るよ」

確信犯っ！ 余計顔が熱くなる。今のあたしは、きつとりンゴだ。

「荷物…って…………」

声ちっさ！ 自分でも分かる。今のは絶対小さい。

なんかもう恥ずかしすぎて翔兄の顔が見れない。

「なに言ってるの、聞こえない」

女は度胸！ 言っのよ実景！

「荷物！ 一緒に！ もも、持ってよ」

「まったく、もっと素直になりなよ。かわいくないから
そう言いながら、半分持つ。」

「うるさい余計なお世話黙れ」

「あつそ。離すよ」

「だ、ダメっ！ 離さないでよ」

あたしは、咄嗟に空いている手で翔兄の左手を押さえた。

「……………」

え、なにこの沈黙。翔兄も、なにそんなに驚いてんの。

「…………嘘だよ」

「…………、知ってるよ」

翔兄から手を離して、2人並んでスーパーから出る。

「ね、聞いて聞いて」

薄暗い道、あたしは翔兄に話し掛ける。

「？」

翔兄は、不思議そうにあたしを見る。

「数学の小テストで、あたし満点取ったんだ」

「……あり得ない」

翔兄はすっごい目を丸くさせた。

「アリエナイなんてことはアリエナイ。だよ」

ニヤリ、と笑ってみせる。

「なにがあつたんだい？」

「占いで1位だった」

「……」

しばらく黙ったあと、長い長いため息をついた。

「さすが、僕の妹だけあるよ」

「そつでしょ……！？」

いきなり翔兄が頭に手を置いて、ちよつとしてから離れた。

（薄暗くて、よかった…）

なんて思っていると、誰かとぶつかった。

「いつてええ」

ぶつかった相手の声が聞こえた。絶対痛くないだろ。

翔兄を見てみる。うわっ、顔恐いよ。

「おいおい、大丈夫かよ？」

大丈夫に決まってんだろ。つか、痛くないし。擦ったぐらいだろうよ。

「やっべ、これ骨折れたな」

「大変じゃねえか」

「慰謝料くれよお、病院行ってくつから」

「そっちの彼氏さんは交通費な」

ぎやははは、と3人の男は笑う。

「……………」

あたしと翔兄は、数秒見つめ合った。

「おいおい、俺達無視でラブラブですかあ？」

「お熱いねえ」

「これだから最近の若いもんは……………」

また、汚く笑う。

「あ、これあたしの兄だから」

「勝手に決めつけるの、やめてほしいね」

一瞬止まった笑い声は、またすぐに響いた。

「嘘はいけないぜえ」

「それはアンタたちでしょ」

今度こそ、笑い声は止まった。

「あん？　なんだって？」

「なに、君たち耳でも遠いの？」

今度は、あたしたちが笑う。

「骨折かあ…それは大変。あたしたちが連れて行ってあげるよ」

「もちろん、僕たちが払うよ。カネ」

男が一步後ろに下がった。

「っ、生意気なガキだな…」

「やっちまえ！」

あたしに向かってきた1人の男に背負い投げを食らわせてやった。
がっ、と呻き、

「ね、聞いて聞いて」

薄暗い道、あたしは翔兄に話し掛ける。

「？」

翔兄は、不思議そうにあたしを見る。

「数学の小テストで、あたし満点取ったんだ」

「……あり得ない」

翔兄はすっごい目を丸くさせた。

「アリエナイなんてことはアリエナイ。だよ」

ニヤリ、と笑ってみせる。

「なにがあっただんだい？」

「占いで1位だった」

「……」

しばらく黙ったあと、長い長いため息をついた。

「さすが、僕の妹だけあるよ」

「そつでしょ……!?!」

いきなり翔兄が頭に手を置いて、ちよつとしてから離れた。

(薄暗くて、よかった…)

なんて思っていると、誰かとぶつかった。

「いってええ」

ぶつかった相手の声が聞こえた。絶対痛くないだろ。

翔兄を見してみる。うわっ、顔恐いよ。

「おいおい、大丈夫かよ?」

大丈夫に決まってるだろ。つか、痛くないし。擦ったぐらいだろつよ。

「やっべ、これ骨折れたな」

「大変じゃねえか」

「慰謝料くれよお、病院行ってくつから」

「そつちの彼氏さんは交通費な」

ぎやははは、と3人の男は笑う。

「……………」

あたしと翔兄は、数秒見つめ合った。

「おいおい、俺達無視でラブラブですかあ？」

「お熱いねえ」

「これだから最近の若いもんは……………」

また、汚く笑う。

「あ、これあたしの兄だから」

「勝手に決めつけるの、やめてほしいね」

一瞬止まった笑い声は、またすぐに響いた。

「嘘はいけないぜえ」

「それはアンタたちでしょ」

今度こそ、笑い声は止まった。

「あん？ なんだって？」

「なに、君たち耳でも遠いの？」

「っ、生意気なガキだな…」

「やっちまえ！」

あたしに向かってきた1人の男に背負い投げを食らわせてやった。

がっ、と呻き、残りの男2人は驚いている。

「っんのクソガキイ！」

あたしにぶつかった方の男（以下男A）と、もう1人の男（以下男B）が殴りかかろうとしてきた。

「オレ達の家族に手え出すとは…とんだ命知らずだなあ？」

「ああ、まったくだ」

不意に、後ろから聞きなれた声が2つした。

「棗兄っ、醒哉！」

「なんでここにいるの？」

2人は、お互い帰り途中にバツタリ会ったんだって。

「なっ、なんだお前たち！？」

それは愚問ってヤツだよ、オニイサンたち。

「俺達は…家族だ！」

棗兄が代表して言った。

「あら、私たちはノケモノ？ それはないんじゃない？」

「凜たちも、家族っ！」

また後ろを振り向くと、あず姉と凜もいた。

「なあに絡まれてんのよ。帰りが遅いから様子見にきたら…」

「みんなそろってる！」

いや、うん。絡まれたよ。揃ってるよ。でも、そこに

「次から次へと…なんなんだよ!？」

と、男B。

「構わん！ やっちまえ!!！」

と、男Aがそれぞれ叫ぶ。

「なに、やる気？ 上等だね。かかってきなよ」

翔兄、挑発するねえ。

「オレがまとめて相手してやるよ」

醒哉も言うねえ。

なんて呑気なことを考えてたら、また違う声が聞こえた。

「ちよいと、アンタたち藍堂さん家の子だよねえ!? なに、絡まれているのかい?」

「田中のおばさん!」

あず姉が、口元を抑えながら言う。てか、相変わらず声大きいなあ。

田中のおばさんは、あたしたち藍堂家の隣に住んでる優しい人。よく煮物とかを作って持ってきてくれる。これが美味。

「ちよつとちよつと、大丈夫かい?」

田中のおばさんは買い物帰りらしい。あたしと同じスーパーの袋を提げていた。

「大じよ……」

「なんだって!? 藍堂の子供だちが絡まれている!?!」

「裕次おっちゃん!」

てやんでい!とか言いながらあたしたちに近づいて来るのは、魚屋の佐久間裕次おじさん。みんなは裕次おっちゃんって呼んでる。

「なんだんだ?」

「なにか事件でもあったのか!?!」

「あれ、実景じゃん！ ちょっと、大丈夫？」

「醍哉後輩じゃねーか。どうした、なにがあった？」

と、わらわらと色んな人が集まってくる。

男AとBを見る。かわいそうに。完全にビビってるよ。2人で抱き合ってるし。

あたしたちは、かくかくしかじかで〜とみんなに事情説明。それを聞いたみんなは、男たちを責める。

「…アンタたら、この子たちのこと知らないのかい？」

田中のおばさんが男たちに聞く。

「しししし、知らねーよっ！」

「俺たちは、藍堂家だ」

棗兄が胸をはって言う。

「藍堂家って…まさかっ……！」

男たちは顔を蒼白にする。そのままかだよ、オニイサンたち。他の地域にも言い伝えとかあるでしょ。

“ 藍堂家には近づくな・絡むな・逆らうな ”

あたしたちに痛い目を遭わされた人たちが口を揃えて言うこと。それが広まり、不良や暴力団やらに恐れられてる…らしい。ここ数年でそういった数が激減したそう。

トドメに、こう言ってる。

「分かったらさあ、謝ってくれないかな？」

「ひいいいっ！…！」

「す、すいませんでしたあぁっ」

男AとBはCを抱えて逃げていった。

一件落着。

その後はまあ、みんなとちょっと話して各々解散となり、最後に残ったのはあたしたち監堂家。みんな、黙ってお互いを見る。

「…ぷっ」

なんかおかしくなって…あたしは笑った。吊られたように、みんなも笑い出す。

「帰る。あたしたちの家に」

翔兄に荷物半分持たせる。嫌がってたけど、ちゃんと持ってくれた。荷物は、すつごく軽かった。翔兄の方が身長あるからかもだけど…やっぱ、優しい。

みんなで馬鹿やりながら、帰宅。夕食の時間も、笑いが絶えなかった。

なんだかんだ言って、みんながみんな好きなんだ。

あたしはベッドに入りながら、改めてみんながいてよかったと思った。好きだと思った。

(たまには占い、信じていいかも……)

あたしがニュースの占いに感謝したのは、秘密って方向で。

つづく

10 呪いメールは津田先生から(前書き)

相変わらずすぐぐだしてます

書いてる友加も

これでいいのか…?と自問自答

10 呪いメールは津田先生から

今は夕食の時間。

あれ取れやそれ取れや自分で取れ馬鹿ヤローと、いつも通りの時間を6人で過ごしていた。

「あ。あのねあのね」

何かを思い出したように、凜がみんなに話しかける。

「じゅぎょーさんかんがあるんだって！」

と笑顔で言う。

「ふむ。授業参観か…いつあるんだ？」

(学校あっても絶対行く気だ)

実景はそう確信する。

「えっとねえ…明日！」

「ブーっ！！」

まさか明日だと思わなく、あまりにも急で、棗吾が盛大に吹いた。

棗吾の前に座っていた実景に被害が及ぶ。

「きゃああつ!?!」

「女子の悲鳴だね」

左隣に座っている翔太の足を思いつきり踏む。

「かわいいじゃん」

右隣に座っている醍哉の足も思いつきり踏む。

2人が実景になにか言おうとしたとき、コップをわし掴みして中に入っている牛乳を棗吾にぶっかける。

「……………」

翔太と醍哉は押し黙り、

「やるじゃない」

「みい姉ちゃ、すげえ!」

梓と凜は感心している。

「…ねえ、なにか言うことあるでしょ?」

「わ…悪かったよ///」

「なんで赤くなってるの!?!」

超ご機嫌ナナメな実景は、椅子から立ち上がり棗吾にアッパーカットを食らわせる。

お約束のようにメガネはふっ飛んで、右隣に座っている梓の味噌汁にダイブ。

チャポンッ

「私の味噌汁っ！ ちょっと実景どうしてくれんのよ」

実景は振り返り、梓を見る。

「あのねあず姉。あたしの夕食見てよ。棗兄の吹いたのがかかったんの！ それからホラっ。あたしの顔にもちょっと付着してんの」
言い返せなくなり、ぐっと押し黙る。

「で？ “私の味噌汁” がなに？」

「なんでもないわよ…」

勝者、藍堂実景。

その後、今日の食器洗い当番を実景の代わりに棗吾やることで方がついた。

「……で、明日授業参観なんだろう?」

翔太が仕切りなおして凧に聞く。

「うん。明日!」

「その件だが」

無駄に静かに、かつこつけて言うのは棗吾。

「全員強制参加! 拒否権は無しっ」

人差し指を突き出す。まったくきまっていない。

「やったあ! みんな、来てくれるの?」

「はあ? オレたちがっこ…」

喜ぶ凧に対し、醍哉が否定しようとするが、棗吾に遮られる。

「そうだぞ。みいんな行くからな!」

(なに言っちゃてんのお!?)

「あのね、凧。行きたいのは山々んだけど…」

「りん、うれしい〜!」

凧の無邪気な笑顔に、梓は勝つことができなかつた。

「あーもう！ 行くわよ行ってやるわよ授業参観……！」
もうヤケクソだ。

「僕は絶対行かないよ」

「オレも行かないぜ」

「あたしもお。つか、去年も全員強制参加だったじゃん
否定する3人に、凜が近づく。

「来て、くれないの？」

「あたしも学校があるから……」

「でも、そう兄ちゃとあず姉ちゃは、来てくれるよ？」

「兄貴たちは…例外だよ」

「りんのこと……キライ、なの……？」

「誰もキライとは言っていないぜっ!？」

そして、凜は今までで一番輝かしい笑顔をつくる。

「じゃあ、来てね！ りん、待ってるね！」

「」「」「……はい」「」

本日の教訓　　凜の笑顔には、絶対逆らえない。

時は流れ、翌日の午後。凜の授業参観に今年も強制参加を迫られた哀れな4人は、それぞれ三崎小学校へと向かう。

実景と醒哉は一緒に行くことになったわけで。

「おい！　みい、行くうぜ」

今は昼休み。準備を終えた醒哉が実景を迎えに来た。三崎中と三崎小は歩いて5分で着けるため、ギリギリまでいれる。

「あれあれ？　実景、弟クンと逃避行！？」

「末永くお幸せに」

玲奈と遙だ。

「はあ！？　なに言ってるの。違うから」

「とか言ってる。実景ちゃんはツンデ……」

「じゃあねまた明日ね醒哉行くよー！」

醒哉の腕をとり、足早に教室を出て行く。

「……ツンデレなんだから」

三崎小に着き、凜のクラスの3年1組に入ると、凜にくつついてる
棗吾とウンザリしている翔太と梓がいた。

「…兄貴、いい加減にしてくれない？ その頭をかち割りたい」
そう言う翔太のまわりには子供が数人いた。

「凜の授業参観に来たくない一番の理由は棗吾なのに……」

あの人、りんちゃんのお姉ちゃんなんだって〜！ と言われては指
をさされ、集まってくる。

子どもたちに慣れてきた梓は、人生について語りだした。拳げ句の
果て、“あずさ先生”と呼ばれる始末。

「あら、藍堂さんこんにちは」

実景と醜哉に話し掛けてきたのは内山さん。凜の友達、内山りえの
お母さんだ。

「久しぶりですね」

「ども」

「相変わらず元気ですね」

棗吾たちを見て、内山さんはうふふ、と笑う。

「まあ、うちの取り柄なんで」

「元気つつーか馬鹿だな」

「賑やかでいいですね。とてもいいことですよ」

なんて優しい笑顔で内山さんに言われれば、嬉しくないはずがなく。

2人は顔を見合わせて、小さく笑った。

次第に保護者も集まってきて、子どもたちのテンションも上がる。

奥様たちは、藍堂家を見つけては挨拶をしてくる。藍堂家三原則があるのと、貸しがあるからだ。

「銀のかみの兄ちゃんだ！」

と言われたと思ったら、醜哉の頭になにか当たった。

「うおっ!?!」

「やーい、当たったあー！」

後ろを向くと、3人の少年たちが笑ってた。

「いい度胸じゃねえか！ おら、くらえっ」

コチヨコチヨコチヨ

「ギャハハハ！ く、くすぐつて〜！」

かなりエンジョイしている。

「つんでれのお姉ちゃん！」

「ぶつ　　！ なななっ！？」

いきなり言われて吹いた。

「……誰に言われたのかなあ？」

すると女の子は、ある1人の人物を指で指した。

「あのね、りんちゃんのお兄ちゃんがゆつてた！」

「情報提供ありがとね」

女の子の頭を撫でてやると、嬉しそうに「どういたしまして！」と
言う。

（かわいい…）

子どもを見てると、なんだか癒される。

「棗兄いい！！！！ 死ねえええ！！！！」

拳に力を込め、顔だとなんだかかわいそう（子どもたちの前だし）

なので、腹をおもいつきり殴る。

「ぐおおおっ」

「棗兄さあ、そんなに殺られたいの？ どうなの？今すぐ殺ってあげようか！？」

ガツと胸ぐらを掴む。

「わわわ悪かった…！」

「悪いですむんだったら、この世に切腹なんていらなんだよ！」

騒ぎに気づいた梓たちは、実景をなだめるのに10分かかったとか。

実景が落ち着いたすぐ後に、凜の担任 津田洋子つたひろこが入ってきた。

津田は、この春実家から上京してきたばかり。藍堂家のことも、あまり知らない。

「あら、若いのね。先生いくつ？」

平然と女の歳を聞くんじゃない。

「えっ！？ えーと…？」

奥様たちに紛れ、まだ子ども的人物が5人いることに気付き、たじろぐ津田。

「なにさらつと年齢聞こうとしてるんだ。女性に失礼だろ」

と言つのはもちろん棗吾。凜の担任ということと、まあ紳士ぶってる。

(あら、かつこいい……)

面食いだつた。

「い、いいんです。今年で25になります」

「四捨五入したら三十路だね」

翔太と実景が、同じことを言う。

「おい、あず姉より酷いぜ?」

醍哉が呆れたように言う。

「そつだぞ。まったく、お前らは思ったことをすぐ口にするから金魚なんだ」

「僕が金魚っていうなら、兄貴はフンコロガシだ」

「なんだと? 俺がフンコロガシなら、お前はピロリ菌だ」

「ちょっと、あたしはなんなの? ねえ、あたしはなんなの?」

「ミトコンドリア」

「意味わかんない」

「黙りなさいよ。ガムテープで口を塞ぐわよ」

「お、今日授業で使ったガムテープあるぜ」

醒哉はガムテープを取り出し、梓に渡す。それで3人は静まるわけ
で。

子どもたちと奥様方は、藍堂家のやりとりを見て爆笑。1人ついて
いけない津田はえ？え？とオドオド。

「どうぞ先生、授業を始めてください」

「ははははい！」

と、梓に言われ授業開始。藍堂家に授業を妨害されるも、適応力の
高い津田は、それはそれはおもしろおかしい授業になった。

授業の終わりには、藍堂家全員とアドレス交換なんてした。

「りんもケータイほしい！」

「凜ちゃんはまだ早いかな」

ニコニコ顔で津田は言う。

「凜が欲しいなら、買ってあげよう！」

「ですよね」

面食いな津田は、棗吾に弱い…っばい。

「棗吾のを凜にあげればいいじゃない」

「じゃあ、アドレス帳変えとかなきゃね。棗兄から凜に」

「そして兄貴はキノコになる」

「翔兄は白血球になつてろ」

「うふふふ」

こうして授業参観は幕を閉じた。

「津田先生は、よく藍堂さん家となかよくなれましたね」

今日会ったばかりなのに…と奥様A。

「はい。とても元気な子たちですね」

「知ってます？ “藍堂家三原則”」

と奥様B。

「知りませんね。なんですか？」

その後、津田に藍堂家のことを話すだけ話して帰って行った奥様方。

教室に1人残された津田は、血眼でメールを打ち、一斉送信。ゲツソリしながら車をとばして帰っていった。

「津田先生からメールだ」

「せんせーから?」

「うん。僕にも届いてるよ」

「私もよ。醒哉は?」

「…届いてんな。なんなんだ?」

「よし、読み上げるぞ」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい(以下略) …

「せんせーどうしてごめんなさいしてるの?」

「ぼ、僕に聞かれても……」

「どうしてかしらね?」

「あず姉、なんで笑ってんだよ!」

「ホラーじゃん！ なにこれ、呪いのメール！？ いやだよあたし！」

「おおお落ち着けみんな！ まずは酸素ポンベを装着するんだ」

謝られる理由が分からない藍堂家は、津田からのメールを“呪いのメール”としてフォルダ移動してロック、二度と読まないように封印した。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1498j/>

今日の藍堂さん家！

2010年10月10日05時29分発行